

## 12・13 世紀の興福寺四月八日仏生会の伎楽

鳥谷部輝彦（日本学術振興会特別研究員 PD（東京成徳大学））

『日本書紀』によると伎楽の起源は、百濟人味摩之が呉国で伎楽舞を学び、桜井で少年に教習したことである。その後、川原寺・橘寺・太秦寺・天王寺で用い、法隆寺・西大寺の資材帳に記され、天平勝宝四年（752）東大寺大仏開眼会で用いられ、『延喜式』（10 世紀前葉）には雅楽寮に伎楽師を置き、源博雅『新撰楽譜』（康保三年（966））現存分には曲目録が載る。しかし唐楽・高麗楽に圧倒されて衰え、鎌倉末頃まで命脈を保った。今日では奈良時代の面・装束の研究があり、林謙三は平安末・鎌倉期の楽譜を用いて調・旋律・拍子を復元的に研究した。

鎌倉期の興福寺では伎楽が四月八日仏生会と七月十五日妓楽会に奏され、四月八日には東大寺でも奏された。本発表ではこのうちの興福寺仏生会に注目するが、楽舞そのものを復元するわけではなく、伎楽を仏生会という枠組みの中に位置付けて理解したい。すなわち、興福寺両門跡の一つであった大乘院の文書を用いて、実際に勤仕した楽人、会場配置、次第などを整理する。

『類聚世要抄』（嘉禎三年（1237）頃成立）第九卷には、内容説明、三つの次第、大乘院門跡の日記の抄録が載る。その三つの次第のうち「仏生会作法事」は他寺の次第と見なせられるため除外する（内山永久寺の仏生会次第かもしれない）。狛光近（1118－1182）による「仏生会次第」の伎楽曲順は、狛近真『教訓抄』（天福元年（1233））巻第四、及び西園寺実兼『伎楽譜』（永仁二年（1249））の曲順と一箇所異なる。日記の抄録によると、嘉承二年（1107）から嘉禎元年（1235）までに 44 回執行されたが、『教訓抄』にはこれらと重複しない 2 回が載る。なお、嘉応三年（1171）以降の日記には「如例」「如常」と書かれるため、法会が定式化していたようである。

『御寺務部』第四卷の承元三年（1209）「泰実法眼記」には、狛則房（1150－1209）と狛有光（1167－1240）が勤仕したこと、金堂前庭の配置などが書かれる。

以上の史料に『興福寺年中行事』第二を加えて、次第の流れを総合的に整理すると、(1) 諸僧・舞人等の着座及び講読師の登高座、(2) 楽人・舞人・八部衆の行道、(3) 唄・散花行道、(4) 伎楽、(5) 楽人・舞人・講読師等の退出、(6) 長吏による浴像、であったと考えられる。